

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第4325336号
(P4325336)

(45) 発行日 平成21年9月2日(2009.9.2)

(24) 登録日 平成21年6月19日(2009.6.19)

(51) Int.Cl.

F 1

CO9K	11/06	(2006.01)	CO9K	11/06	620
HO1L	51/50	(2006.01)	CO9K	11/06	625
			CO9K	11/06	635
			CO9K	11/06	645
			CO9K	11/06	660

請求項の数 4 (全 42 頁) 最終頁に続く

(21) 出願番号 特願2003-327409 (P2003-327409)
 (22) 出願日 平成15年9月19日(2003.9.19)
 (65) 公開番号 特開2005-89674 (P2005-89674A)
 (43) 公開日 平成17年4月7日(2005.4.7)
 審査請求日 平成18年8月11日(2006.8.11)

(73) 特許権者 000222118
 東洋インキ製造株式会社
 東京都中央区京橋2丁目3番13号
 (72) 発明者 田中 洋明
 東京都中央区京橋2丁目3番13号 東洋
 インキ製造株式会社内
 (72) 発明者 須田 康政
 東京都中央区京橋2丁目3番13号 東洋
 インキ製造株式会社内
 (72) 発明者 天野 真臣
 東京都中央区京橋2丁目3番13号 東洋
 インキ製造株式会社内
 (72) 発明者 鳥羽 泰正
 東京都中央区京橋2丁目3番13号 東洋
 インキ製造株式会社内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 有機エレクトロルミネッセンス素子用材料および有機エレクトロルミネッセンス素子

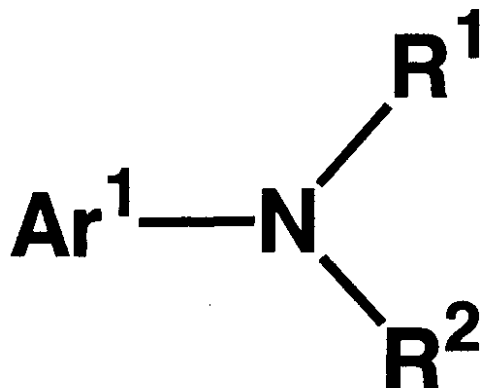
(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

下記一般式[1]で表されるアミン化合物と、下記一般式[2]で表されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物とを含んでなる有機エレクトロルミネッセンス素子用材料。

一般式[1]

【化1】

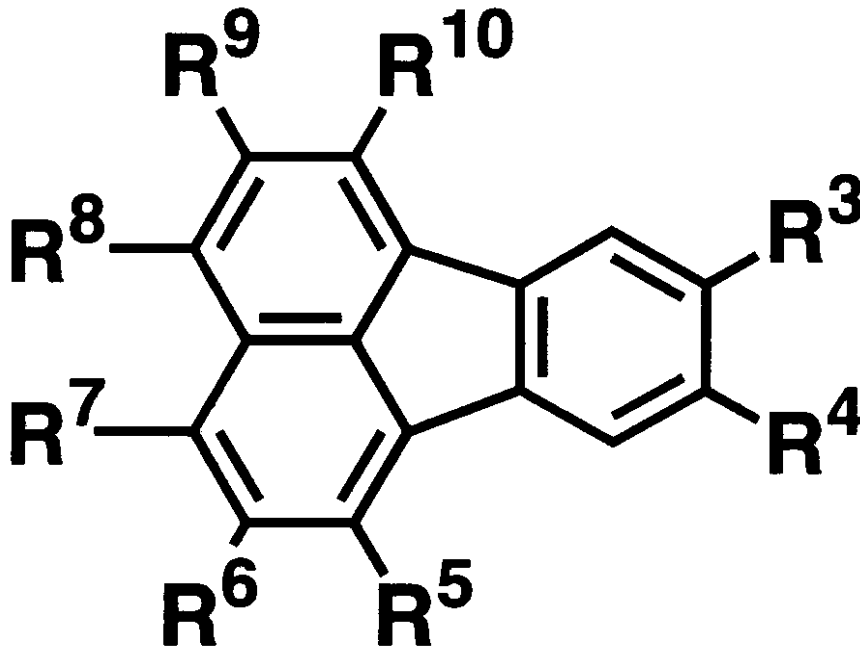


[式中、 Ar^1 は、置換もしくは未置換のペリレニル基、 R^1 および R^2 は、それぞれ独立に、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。

Ar^1 と R^1 、 Ar^1 と R^2 、 R^1 と R^2 は、互いに結合して環を形成しても良い。]

一般式 [2]

【化 2】



10

20

[式中、 $R^3 \sim R^{10}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^1)X^2$ で表される基より選ばれる1

30

価の有機残基であって、 $R^3 \sim R^{10}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^1)X^2$ で表される基である。
ここで、 X^1 および X^2 は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^3 \sim R^{10}$ 、 X^1 、および X^2 は、互いに隣接する基同士で一体となって環を形成しても良い。]

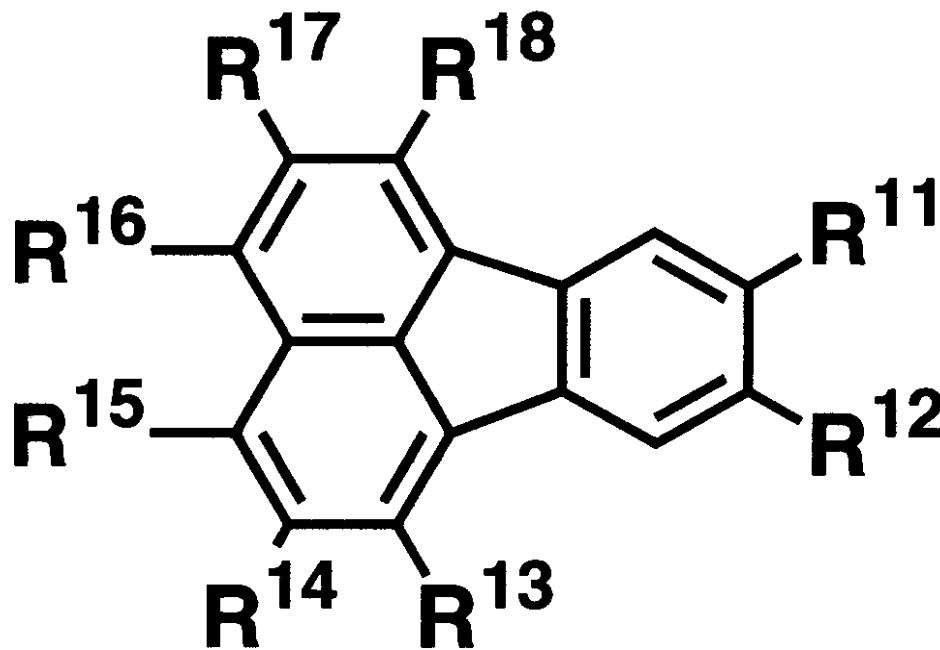
【請求項 2】

一般式 [2] で表されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物が、下記一般式 [3] で表されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物である請求項 1 記載の有機エレクトロルミネッセンス素子用材料。

40

一般式 [3]

【化3】



10

20

〔式中、 $R^{11} \sim R^{18}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^3)X^4$ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、 $R^{11} \sim R^{18}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^3)X^4$ で表される基であり、 $R^{11} \sim R^{18}$ の内、少なくとも一つは電子吸引性の基である。

ここで、 X^3 および X^4 は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^{11} \sim R^{18}$ 、 X^3 、および X^4 は、互いに隣接する基同士で一体となって環を形成しても良い。]

30

【請求項3】

陽極と陰極とからなる一对の電極間に、発光層または発光層を含む複数層の有機化合物薄膜を形成してなる有機エレクトロルミネッセンス素子において、少なくとも一層が、請求項1または2記載の有機エレクトロルミネッセンス素子用材料を含む有機エレクトロルミネッセンス素子。

【請求項4】

陽極と陰極とからなる一对の電極間に、発光層または発光層を含む複数層の有機化合物薄膜を形成してなる有機エレクトロルミネッセンス素子において、発光層が、請求項1または2記載の有機エレクトロルミネッセンス素子用材料を含む有機エレクトロルミネッセンス素子。

40

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は平面光源や表示に使用される有機エレクトロルミネッセンス素子に関する。さらに詳しくは、低い駆動電圧で高い色純度と輝度を示す赤色発光用有機エレクトロルミネッセンス素子と有機エレクトロルミネッセンス素子用材料に関する。

【背景技術】

【0002】

陰極から注入された電子と陽極から注入された正孔とがこれら両極に挟まれた有機蛍光

50

体内で再結合する際に発光するという有機エレクトロルミネッセンス（EL）素子は、固体発光型の表示素子としての用途が有望視され、近年活発に研究開発が行われている。

【0003】

この研究は、イーストマン・コダック社のC.W.Tang氏らによりAppl.Phys.Lett.,第51巻,913頁,1987年発行に報告された有機薄膜を積層したEL素子に端を発しており、この報告では、金属キレート錯体を発光層、アミン系化合物を正孔注入層に使用することで、6~10Vの直流電圧での輝度が数1000(cd/m²)、最大発光効率が1.5(lm/W)の緑色発光を得ている。現在、様々な研究機関で開発が進められている有機EL素子は、基本的にこのイーストマン・コダック社の構成を踏襲しているといえる。

10

【0004】

有機EL素子の中でも、特に赤色発光を示す有機EL素子は、その有用性から様々な材料を用いた素子の研究が進められてきたが、ホスト材料の中に微量のドーパントを共蒸着などの方法によって混入させて発光層を形成し、ドーパントからの発光を得るという方法が有効な方法として検討されている。そのような例として、C.H.Chenら著,Macromol.Symp.,第125号,34~36頁および49~58頁,1997年発行に記載されている方法では、トリス(8-ヒドロキシキノリナート)アルミニウムをホスト材料に、DCM、DCJ、DCJT、DCJTBといった4H-ピラン誘導体をドーパントに用いて橙色から赤色の発光が得られる有機EL素子を報告している。

20

【0005】

また、ペリレン構造を有する化合物を用いた有機EL素子については、例えば、特開平10-251633号公報、特開平11-144869号公報、特開2001-11031号公報、特開2001-176664号公報、特開2002-129043号公報、特開2003-201472号公報が知られている。

【0006】

ところで近年、特開2003-238516号公報記載のアリールアミノ基が結合したフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物を用いた有機EL素子において、良好な発光輝度、発光効率、色純度を示すことが明らかにされた。

【非特許文献1】Appl.Phys.Lett.,第51巻,913頁,1987年

【非特許文献2】Macromol.Symp.,第125号,34~36頁および49~58頁,1997年

30

【特許文献1】特開平10-251633号公報

【特許文献2】特開平11-144869号公報

【特許文献3】特開2001-11031号公報

【特許文献4】特開2001-176664号公報

【特許文献5】特開2002-129043号公報

【特許文献6】特開2003-201472号公報

【特許文献7】特開2003-238516号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

40

【0007】

従来技術に述べた赤色の高輝度発光を得るための有機EL素子は、色純度が悪いという欠点があった。4H-ピラン誘導体をドーパントに用いた有機EL素子は、発光色が不十分であり、駆動電圧が高く発光輝度が低いという問題があった。また、ペリレン構造を有する化合物を用いた有機EL素子の場合、発光ピーク幅が広く色純度の点で不十分であった。さらに、フルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物を用いた上記有機EL素子は、色純度の高い素子を作成することができるものの、駆動電圧が高いという欠点があった。そのため、より一層低い駆動電圧で発光し、高い色純度と輝度を示す赤色発光を得ることができる有機EL素子が求められていた。

【課題を解決するための手段】

50

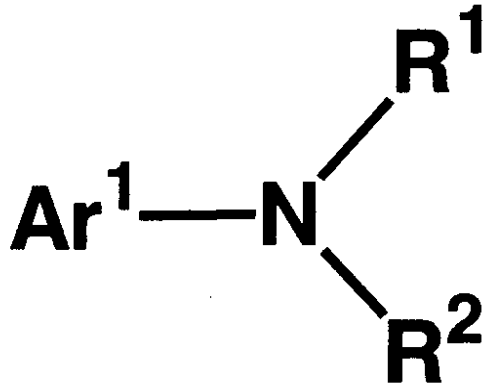
【 0 0 0 8 】

本発明者らは、以上の諸問題を考慮し解決すべく鋭意研究を重ねた結果、本発明に至った。すなわち、本発明は、下記一般式 [1] で表されるアミン化合物と、下記一般式 [2] で表されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物とを含んでなる有機エレクトロルミネッセンス素子用材料に関する。

一般式 [1]

【 0 0 0 9 】

【 化 1 】



10

20

【 0 0 1 0 】

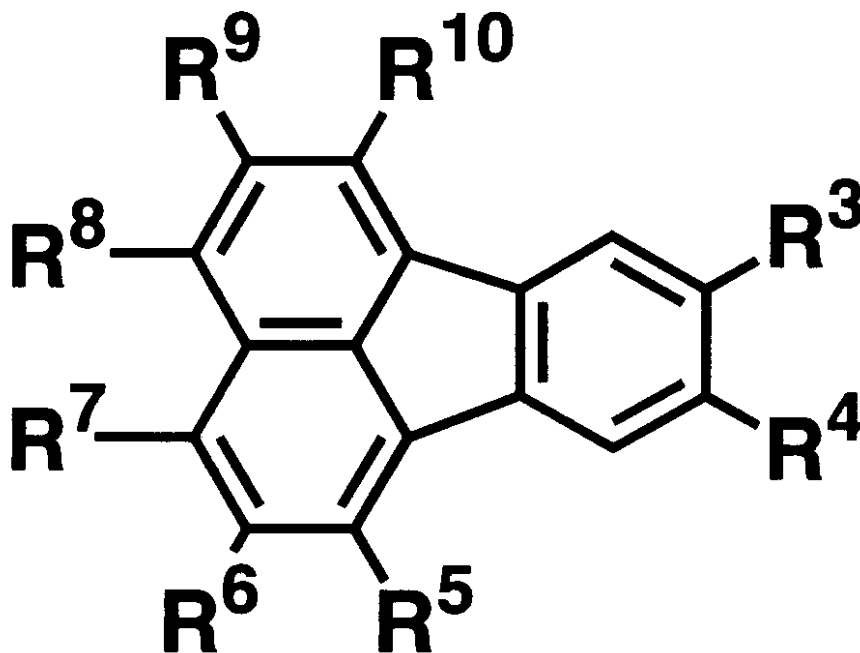
[式中、Ar¹は、置換もしくは未置換のペリレニル基、R¹およびR²は、それぞれ独立に、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。

Ar¹とR¹、Ar¹とR²、R¹とR²は、互いに結合して環を形成しても良い。]

一般式 [2]

【 0 0 1 1 】

【 化 2 】



30

40

【 0 0 1 2 】

[式中、R³~R¹⁰は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基

50

、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^1)X^2$ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、 $R^3 \sim R^{10}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^1)X^2$ で表される基である。

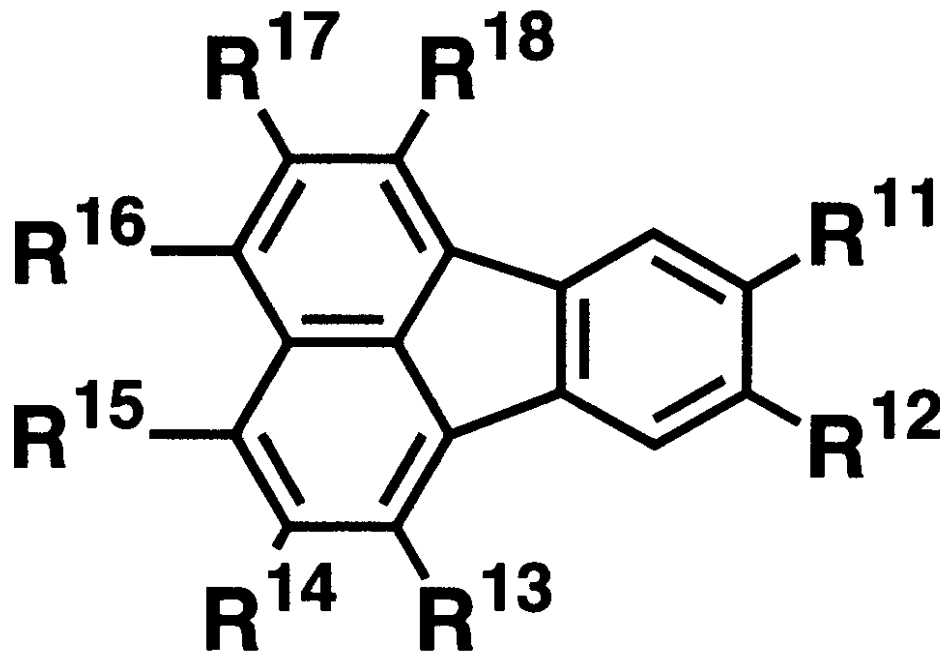
ここで、 X^1 および X^2 は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^3 \sim R^{10}$ 、 X^1 、および X^2 は、互いに隣接する基同士で一体となって環を形成しても良い。]

また、本発明は、前記一般式 [2] で表されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物が、下記一般式 [3] で表されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物である請求項1記載の有機エレクトロルミネッセンス素子用材料に関する。

一般式 [3]

【 0 0 1 3 】

【 化 3 】



【 0 0 1 4 】

[式中、 $R^{11} \sim R^{18}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^3)X^4$ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、 $R^{11} \sim R^{18}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^3)X^4$ で表される基であり、 $R^{11} \sim R^{18}$ の内、少なくとも一つは電子吸引性の基である。

ここで、 X^3 および X^4 は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^{11} \sim R^{18}$ 、 X^3 、および X^4 は、互いに隣接する基同士で一体となって環を形成しても良い。]

【 0 0 1 5 】

また、本発明は、陽極と陰極とからなる一对の電極間に、発光層または発光層を含む複数層の有機化合物薄膜を形成してなる有機エレクトロルミネッセンス素子において、少なくとも一層が、上記有機エレクトロルミネッセンス素子用材料を含む有機エレクトロルミ

10

20

30

40

50

ネッセンス素子に関する。

【0016】

また、本発明は、陽極と陰極とからなる一对の電極間に、発光層または発光層を含む複数層の有機化合物薄膜を形成してなる有機エレクトロルミネッセンス素子において、発光層が、上記有機エレクトロルミネッセンス素子用材料を含む有機エレクトロルミネッセンス素子に関する。

【発明の効果】

【0017】

本発明の有機EL素子用材料に用いて作成した有機EL素子は、従来に比べて低い駆動電圧で発光するため、壁掛けテレビ等のフラットパネルディスプレイや平面発光体として好適に使用することができ、複写機やプリンター等の光源、液晶ディスプレイや計器類等の光源、表示板、標識灯等への応用が可能である。

10

【発明を実施するための最良の形態】

【0018】

以下、詳細にわたって本発明を説明する。まず、本発明で使用される一般式[1]で表されるアミン化合物について説明する。

【0019】

まず、一般式[1]中のAr¹は、置換もしくは未置換のペリレニル基を表し、未置換のペリレニル基としては、1-ペリレニル基、2-ペリレニル基、3-ペリレニル基があげられる。これらペリレニル基は、さらに他の置換基によって置換されていても良い。本発明において、置換基としては、1価の脂肪族炭化水素基、1価の芳香族炭化水素基、1価の脂肪族複素環基、1価の芳香族複素環基、ハロゲン原子、アルコキシ基、アリーロキシ基、アルキルチオ基、アリールチオ基、アシル基、アルコキシカルボニル基、アリーロキシカルボニル基、アルキルスルホニル基、アリールスルホニル基、トリアルキルシリル基、シアノ基等があげられる。

20

【0020】

ここで、1価の脂肪族炭化水素基としては、炭素数1~18の1価の脂肪族炭化水素基を指し、そのようなものとしては、アルキル基、アルケニル基、アルキニル基、シクロアルキル基があげられる。

【0021】

したがって、アルキル基としては、メチル基、エチル基、プロピル基、イソプロピル基、ブチル基、イソブチル基、sec-ブチル基、tert-ブチル基、ペンチル基、イソペンチル基、ヘキシル基、ヘプチル基、オクチル基、デシル基、ドデシル基、ペンタデシル基、オクタデシル基といった炭素数1~18のアルキル基があげられる。

30

【0022】

また、アルケニル基としては、ビニル基、1-プロペニル基、2-プロペニル基、イソプロペニル基、1-ブテニル基、2-ブテニル基、3-ブテニル基、1-オクテニル基、1-デセニル基、1-オクタデセニル基といった炭素数2~18のアルケニル基があげられる。

【0023】

また、アルキニル基としては、エチニル基、1-プロピニル基、2-プロピニル基、1-ブチニル基、2-ブチニル基、3-ブチニル基、1-オクチニル基、1-デシニル基、1-オクタデシニル基といった炭素数2~18のアルキニル基があげられる。

40

【0024】

また、シクロアルキル基としては、シクロプロピル基、シクロブチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、シクロヘプチル基、シクロオクチル基、シクロオクタデシル基、2-ボルニル基、2-イソボルニル基、1-アダマンチル基といった炭素数3~18のシクロアルキル基があげられる。

【0025】

さらに、1価の芳香族炭化水素基としては、炭素数6~30の1価の単環、縮合環、環

50

集合芳香族炭化水素基があげられる。ここで、炭素数6～30の1価の単環芳香族炭化水素基としては、フェニル基、o-トリル基、m-トリル基、p-トリル基、2,4-キシリル基、p-クメニル基、メシチル基等の炭素数6～30の1価の単環芳香族炭化水素基があげられる。

【0026】

また、1価の縮合環芳香族炭化水素基としては、1-ナフチル基、2-ナフチル基、1-アンスリル基、2-アンスリル基、5-アンスリル基、1-フェナンスリル基、9-フェナンスリル基、1-アセナフチル基、2-アズレニル基、1-ピレニル基、2-トリフェニレニル基、1-ピレニル基、2-ピレニル基、1-ペリレニル基、2-ペリレニル基、3-ペリレニル基、2-トレフェニレニル基、2-インデニル基、1-アセナフチレニル基、2-ナフタセニル基、2-ペンタセニル基等の炭素数10～30の1価の縮合環炭化水素基があげられる。

10

【0027】

また、1価の環集合芳香族炭化水素基としては、o-ビフェニリル基、m-ビフェニリル基、p-ビフェニリル基、テルフェニリル基、7-(2-ナフチル)-2-ナフチル基等の炭素数12～30の1価の環集合炭化水素基があげられる。

【0028】

また、1価の脂肪族複素環基としては、3-イソクロマニル基、7-クロマニル基、3-クマリニル基、ピペリジノ基、モルホリノ基、2-モルホリノ基等の炭素数3～18の1価の脂肪族複素環基があげられる。

20

【0029】

また、1価の芳香族複素環基としては、2-フリル基、3-フリル基、2-チエニル基、3-チエニル基、2-ベンゾフリル基、2-ベンゾチエニル基、2-ピリジル基、3-ピリジル基、4-ピリジル基、2-キノリル、5-イソキノリル基等の炭素数3～30の1価の芳香族複素環基があげられる。

【0030】

また、ハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子、臭素原子があげられる。

【0031】

また、アルコキシ基としては、メトキシ基、エトキシ基、プロポキシ基、ブトキシ基、tert-ブトキシ基、オクチルオキシ基、tert-オクチルオキシ基、2-ボルニルオキシ基、2-イソボルニルオキシ基、1-アダマンチルオキシ基等の炭素数1～18のアルコキシ基があげられる。

30

【0032】

また、アリールオキシ基としては、フェノキシ基、4-tert-ブチルフェノキシ基、1-ナフチルオキシ基、2-ナフチルオキシ基、9-アンスリルオキシ基といった炭素数6～30のアリールオキシ基があげられる。

【0033】

また、アルキルチオ基としては、メチルチオ基、エチルチオ基、tert-ブチルチオ基、ヘキシルチオ基、オクチルチオ基といった炭素数1～18のアルキルチオ基があげられる。

40

【0034】

また、アリールチオ基としては、フェニルチオ基、2-メチルフェニルチオ基、4-tert-ブチルフェニルチオ基といった炭素数6～30のアリールチオ基があげられる。

【0035】

また、アシル基としては、アセチル基、プロピオニル基、ピパロイル基、シクロヘキシルカルボニル基、ベンゾイル基、トルオイル基、アニソイル基、シンナモイル基等の炭素数2～18のアシル基があげられる。

【0036】

また、アルコキシカルボニル基としては、メトキシカルボニル基、エトキシカルボニル基、ベンジルオキシカルボニル基等の炭素数2～18のアルコキシカルボニル基があげら

50

れる。

【 0 0 3 7 】

また、アリーロキシカルボニル基としては、フェノキシカルボニル基、ナフチロキシカルボニル基等の炭素数 7 ~ 3 0 のアリーロキシカルボニル基があげられる。

【 0 0 3 8 】

また、アルキルスルホニル基としては、メシル基、エチルスルホニル基、プロピルスルホニル基等の炭素数 1 ~ 1 8 のアルキルスルホニル基があげられる。

【 0 0 3 9 】

また、アリールスルホニル基としては、ベンゼンスルホニル基、p - トルエンスルホニル基等の炭素数 6 ~ 3 0 のアリールスルホニル基があげられる。

10

【 0 0 4 0 】

また、トリアルキルシリル基としては、トリメチルシリル基、トリエチルシリル基、ジメチルエチルシリル基、トリエチルシリル基、トリブチルシリル基、トリオクチルシリル基等の炭素数 6 ~ 3 0 のトリアルキルシリル基があげられる。

【 0 0 4 1 】

これら置換基は、さらに他の置換基によって置換されていても良く、また、これら置換基同士が結合し、環を形成していても良い。

【 0 0 4 2 】

以上述べた一般式 [1] 中の $A r^1$ としては、置換もしくは未置換の 1 - ペリレニル基、置換もしくは未置換の 2 - ペリレニル基、置換もしくは未置換の 3 - ペリレニル基があげられるが、このうち、置換もしくは未置換の 3 - ペリレニル基が好ましく、未置換の 3 - ペリレニル基が特に好ましい。また、置換 3 - ペリレニル基の中で好ましい置換基としては、前述のアルキル基、1 価の芳香族炭化水素基、1 価の芳香族複素環基があげられ、特に好ましい置換基としては、1 価の芳香族炭化水素基があげられる。

20

【 0 0 4 3 】

また、上に述べた置換基における炭素数としては 1 ~ 1 8 が好ましく、1 ~ 1 2 がさらに好ましい。この理由として、これら置換基の炭素数が多くなると、蒸着によって素子を作成しようとした場合の蒸着性が悪くなるといった懸念があるためである。

【 0 0 4 4 】

次に、一般式 [1] 中の R^1 および R^2 について説明する。 R^1 および R^2 は、置換もしくは未置換の 1 価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の 1 価の芳香族複素環基より選ばれる 1 価の有機残基である。ここでいう置換基とは、 $A r^1$ の置換基で説明した置換基と同義である。また、未置換の 1 価の芳香族炭化水素基、未置換の 1 価の芳香族複素環基とは、それぞれ $A r^1$ の置換基で説明した 1 価の芳香族炭化水素基、未置換の 1 価の芳香族複素環基と同義である。

30

【 0 0 4 5 】

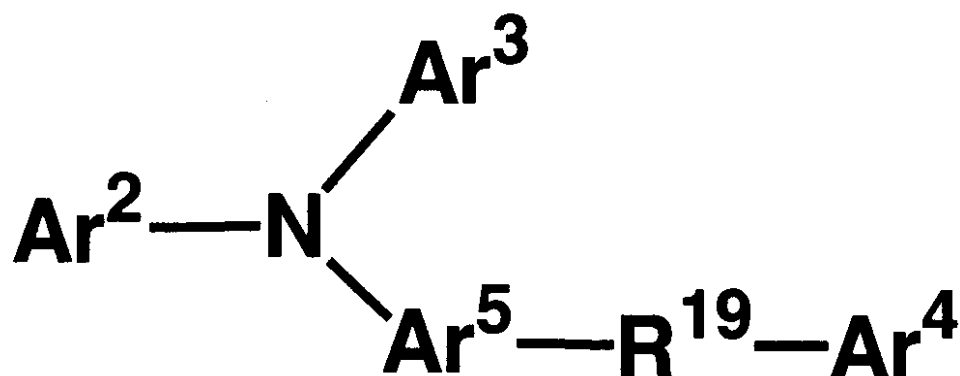
上記一般式 [1] で表されるアミン化合物の内、好ましいものとしては、下記一般式 [4] で表されるアミン化合物があげられる。

一般式 [4]

【 0 0 4 6 】

40

【化4】



10

【0047】

[式中、 Ar^2 は、置換もしくは未置換のペリレニル基、 Ar^3 および Ar^4 は、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、 Ar^5 は、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基、 R^{19} は、直接結合、 O 、 S 、 $=\text{C}(\text{R}^{20})\text{R}^{21}$ 、 $=\text{Si}(\text{R}^{22})\text{R}^{23}$ のいずれかである(ここに、 $\text{R}^{20}\sim\text{R}^{23}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基のいずれかである)。 Ar^2 と Ar^3 、 Ar^3 と Ar^5 、 Ar^5 と Ar^2 は、互いに結合して環を形成していても良い。]

20

ここでいう置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基とは、それぞれ、一般式[1]で説明した置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基と同義である。

【0048】

上記一般式[4]における2価の芳香族炭化水素基とは、2価の単環もしくは縮合環、環集合芳香族炭化水素基を意味し、例えば、フェニレン基、ナフチレン基、アンスリレン基、ピフェニレン基、*p*-テルフェニル-4,4'-ジイル基、*m*-テルフェニル-3,3'-ジイル基、*m*-テルフェニル-4,4'-ジイル基、[1,2'-ビナフタレン]-4,5'-ジイル等の炭素数6~30の2価の芳香族炭化水素基があげられる。また、一般式[4]における2価の芳香族複素環基とは、2価の単環もしくは縮合環、環集合芳香族複素環基を意味し、例えば、2,5-フリレン基、2,5-チエニレン基、2,5-ピリジレン基、2,5-ピラジレン基、2,6-キノリレン基、1,4-イソキノリレン基、2,3-キノキサリレン基等の炭素数4~30の2価の芳香族複素環基があげられる。

30

【0049】

以上述べた2価の芳香族炭化水素基または芳香族複素環基の内、好ましいものとしては、フェニレン基、ナフチレン基、ピフェニレン基等の炭素数6~12の2価の芳香族炭化水素基があげられる。

40

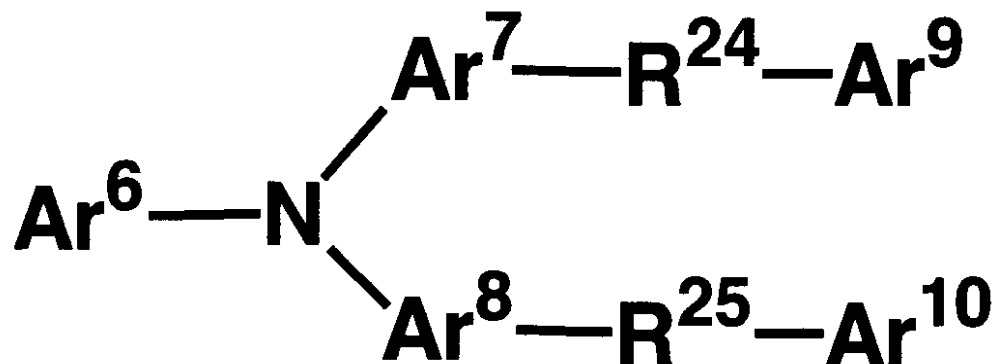
【0050】

さらに、上記一般式[4]で表されるアミン化合物の内、さらに好ましいものとして、下記一般式[5]で表されるアミン化合物があげられる。

一般式[5]

【0051】

【化5】



10

【0052】

[式中、Ar⁶は、置換もしくは未置換のペリレニル基、Ar⁷およびAr⁸は、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基、Ar⁹およびAr¹⁰は、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、R²⁴およびR²⁵は、直接結合、O、S、=C(R²⁶)R²⁷、=Si(R²⁸)R²⁹のいずれかである(ここに、R²⁶~R²⁹は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基のいずれかである)。Ar⁶とAr⁷、Ar⁷とAr⁸、Ar⁸とAr⁶は、互いに結合して環を形成していても良い。]

20

【0053】

ここでいう置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基とは、それぞれ、一般式[1]および一般式[4]で説明した置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基と同義である。

30

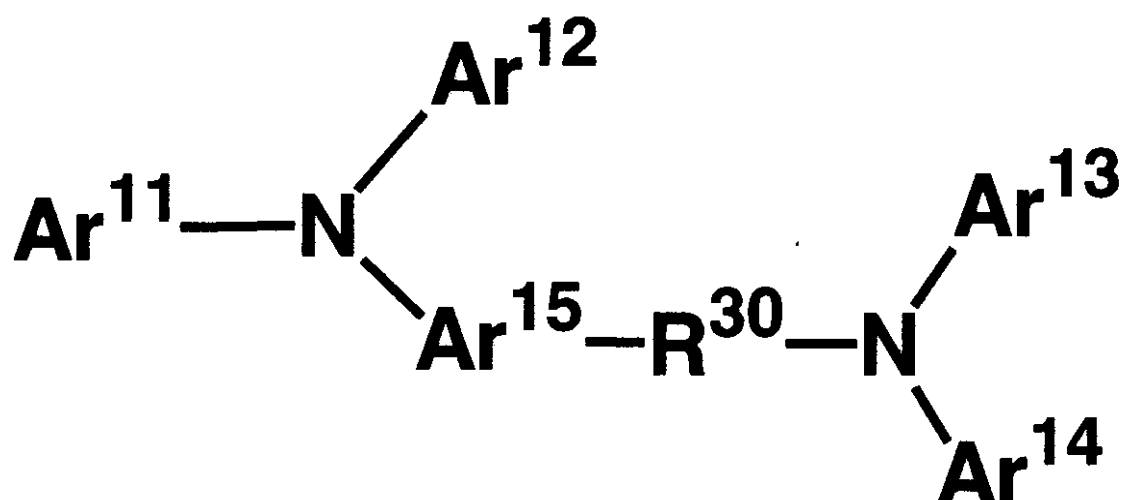
【0054】

また、一般式[1]で表されるアミン化合物の内、他の好ましいものとしては、下記一般式[6]で表されるアミン化合物があげられる。

一般式[6]

【0055】

【化6】



10

【0056】

〔式中、 Ar^{11} は、置換もしくは未置換のペリレニル基、 Ar^{12} 、 Ar^{13} および Ar^{14} は、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、 Ar^{15} は、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基、 R^{30} は、直接結合、 O 、 S 、 $=\text{C}(\text{R}^{31})\text{R}^{32}$ 、 $=\text{Si}(\text{R}^{33})\text{R}^{34}$ のいずれかである(ここに、 $\text{R}^{31} \sim \text{R}^{34}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基のいずれかである)。 Ar^{11} と Ar^{12} 、 Ar^{12} と Ar^{15} 、 Ar^{15} と Ar^{11} 、 Ar^{13} と Ar^{14} 、 Ar^{14} と R^{30} 、 R^{30} と Ar^{13} は、互いに結合して環を形成していても良い。]

20

【0057】

ここでいう置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基とは、それぞれ、一般式〔1〕および一般式〔4〕で説明した置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基と同義である。

30

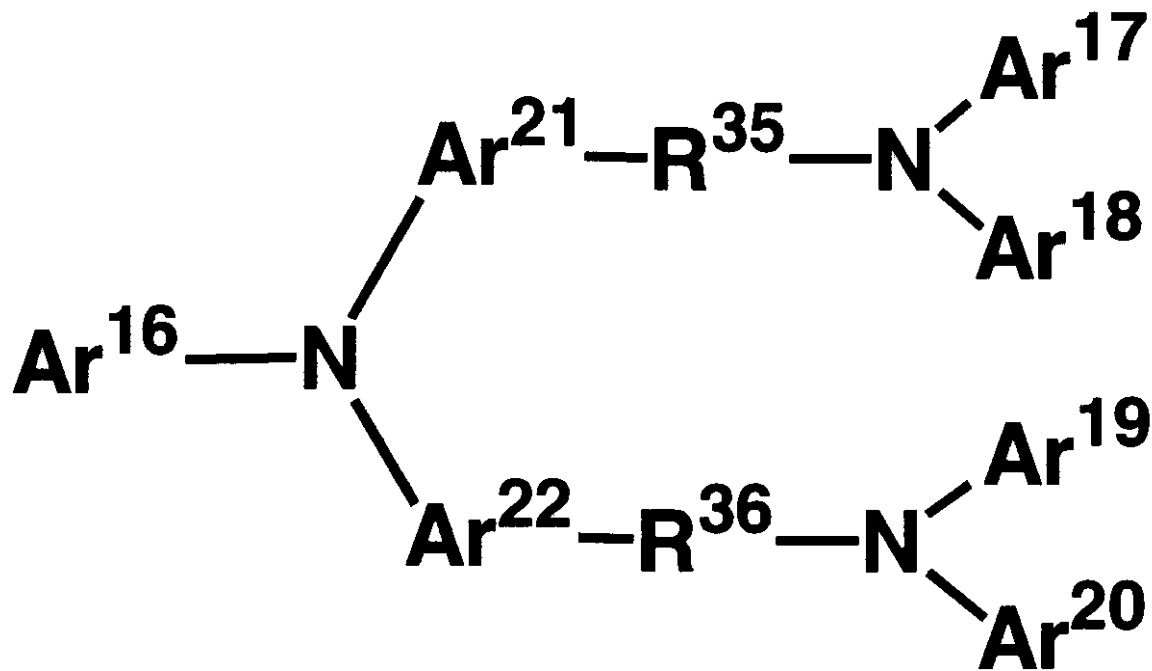
【0058】

さらに、上記一般式〔6〕で表されるアミン化合物の内、特に好ましいものとしては、下記一般式〔7〕で表されるアミン化合物があげられる。

一般式〔7〕

【0059】

【化7】



10

20

【0060】

[式中、 Ar^{16} は、置換もしくは未置換のペリレニル基、 $Ar^{17} \sim Ar^{20}$ は、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、 Ar^{21} および Ar^{22} は、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基、 R^{35} および R^{36} は、直接結合、O、S、 $=C(R^{37})R^{38}$ 、 $=Si(R^{39})R^{40}$ のいずれかである(ここに、 $R^{37} \sim R^{40}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基のいずれかである)。 Ar^{16} と Ar^{21} 、 Ar^{21} と Ar^{22} 、 Ar^{22} と Ar^{16} 、 Ar^{17} と Ar^{18} 、 Ar^{18} と R^{35} 、 R^{35} と Ar^{17} 、 Ar^{19} と Ar^{20} 、 Ar^{20} と R^{36} 、 R^{36} と Ar^{19} は、互いに結合して環を形成していても良い。]

30

【0061】

ここでいう置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基とは、それぞれ、一般式[1]および一般式[4]で説明した置換基、置換もしくは未置換のペリレニル基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の2価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の2価の芳香族複素環基と同義である。

40

【0062】

以上、本発明に用いる一般式[1]で表されるアミン化合物について説明したが、これらアミン化合物の分子量としては、2000以下が好ましく、1500以下がさらに好ましく、1000以下が特に好ましい。この理由として、分子量が大きいと、蒸着によって素子を作成する場合の蒸着性が悪くなる懸念が考えられるためである。

【0063】

以下、表1に本発明の有機EL素子用材料として用いることができる一般式[1]で表されるアミン化合物の代表例を示すが、本発明は、なんらこれらに限定されるものではない(ただし、表中、t-Buはtert-ブチル基を、Phはフェニル基を、Tolはp-トリル基を表す)。

50

【 0 0 6 4 】

【 表 1 】

化合物	化学構造
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	

化合物	化学構造
8	
9	
10	
11	
12	
13	
14	

10

20

30

40

【 0 0 6 5 】

【表 1】

化合物	化学構造	化合物	化学構造
15		22	
16		23	
17		24	
18		25	
19		26	
20		27	
21		28	

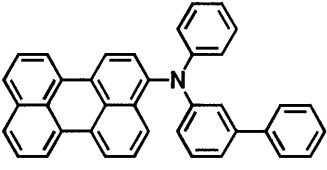
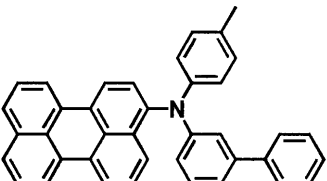
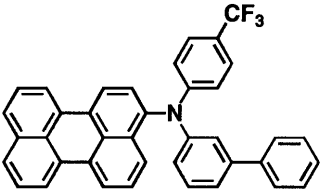
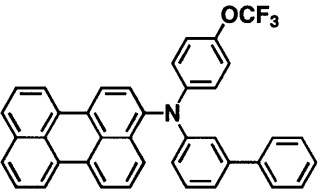
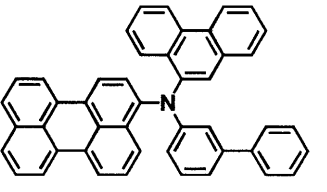
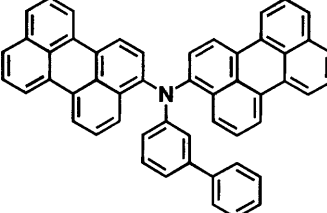
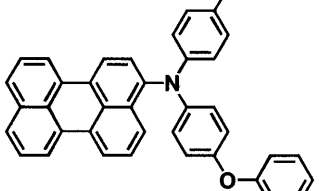
10

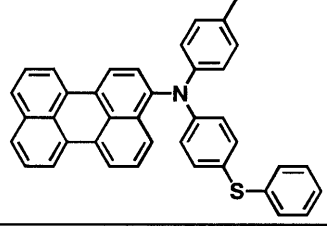
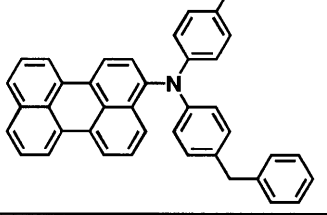
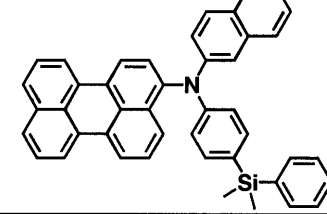
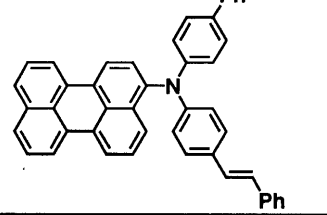
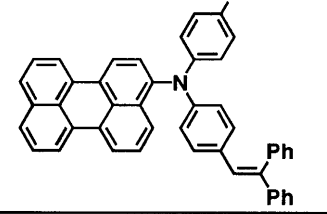
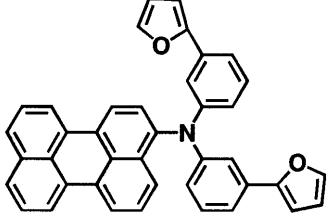
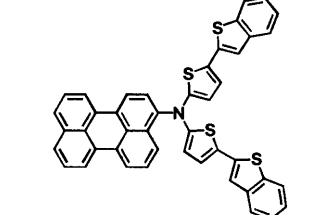
20

30

40

【表 1】

化合物	化学構造
29	
30	
31	
32	
33	
34	
35	

化合物	化学構造
36	
37	
38	
39	
40	
41	
42	

10

20

30

40

【表 1】

化合物	化学構造
43	
44	
45	
46	
47	
48	
49	

化合物	化学構造
50	
51	
52	
53	
54	
55	
56	

10

20

30

40

【表 1】

化合物	化学構造
57	
58	
59	
60	
61	
62	
63	

化合物	化学構造
64	
65	
66	
67	
68	
69	
70	

10

20

30

40

【表 1】

化合物	化学構造
71	
72	
73	
74	
75	
76	
77	

化合物	化学構造
78	
79	
80	

10

20

30

40

【0070】

つぎに、本発明で用いる一般式 [2] で表されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物について説明する。一般式 [2] 中の $R^3 \sim R^{10}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の 1 価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の 1 価の芳香族炭化水素基、置換も

50

しくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシル基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または - N (X¹) X² で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、R³ ~ R¹⁰ の内、少なくとも一つは - N (X¹) X² で表される基である。ここで、X¹ および X² は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。ここでいう置換基とは、Ar¹ の置換基で説明した置換基と同義である。また、ここでいう1価の脂肪族炭化水素基、1価の芳香族炭化水素基、1価の脂肪族複素環基、1価の芳香族複素環基、アルコキシル基、アリールオキシ基、トリアルキルシリル基、および、ハロゲン原子とは、それぞれ、Ar¹ の置換基で説明した1価の脂肪族炭化水素基、1価の芳香族炭化水素基、1価の脂肪族複素環基、1価の芳香族複素環基、アルコキシル基、アリールオキシ基、および、トリアルキルシリル基、および、ハロゲン原子と同義である。

10

【0071】

一般式 [2] 中の R³ ~ R¹⁰ の中で好ましい有機残基としては、水素原子の他、有機残基の炭素数が 1 ~ 18 のものが好ましい。この理由として、これら置換基の炭素数が多くなると、蒸着によって素子を作成しようとした場合の蒸着性が悪くなるといった懸念が考えられるためである。

【0072】

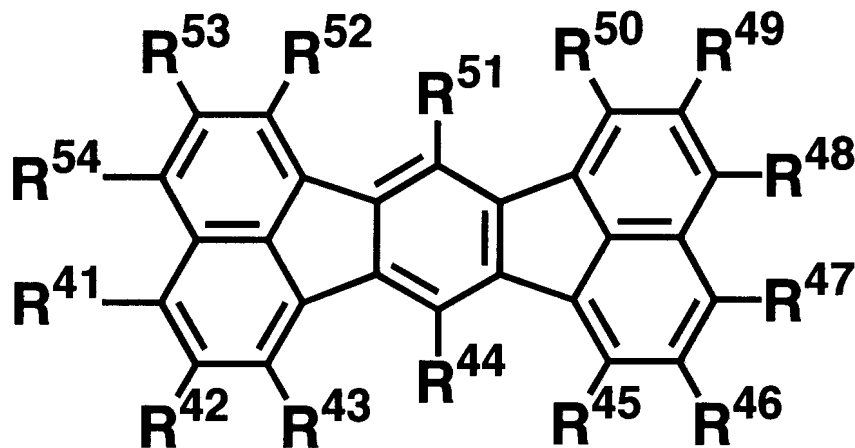
本発明で用いられる縮合芳香族化合物は、一般式 [2] で表されるフルオランテン骨格を有していれば特に制限されないが、下記一般式 [8] ~ [18] で示されるフルオランテン骨格が好ましい。

20

一般式 [8]

【0073】

【化8】



30

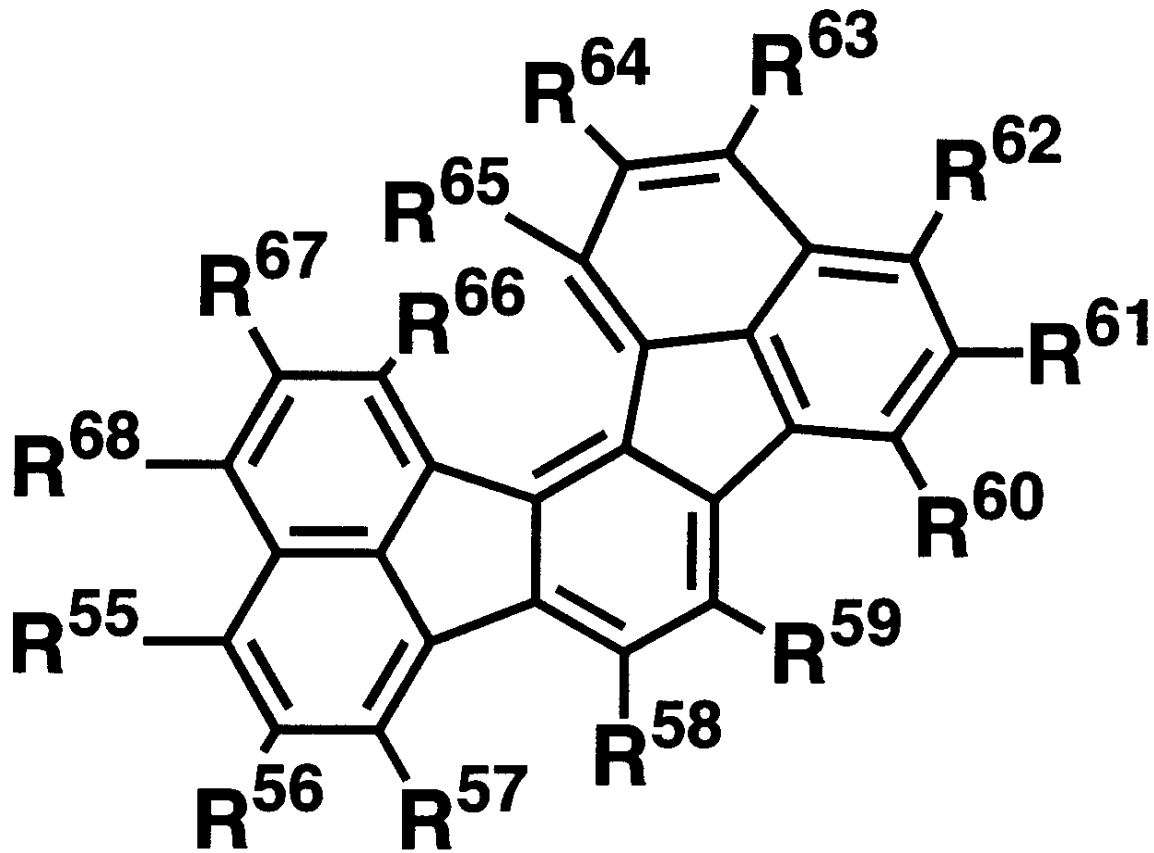
【0074】

[式中、R⁴¹ ~ R⁵⁴ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシル基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または - N (X⁵) X⁶ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、R⁴¹ ~ R⁵⁴ の内、少なくとも一つは - N (X⁵) X⁶ で表される基である。ここに、X⁵ および X⁶ は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。R⁴¹ ~ R⁵⁴、X⁵、および X⁶ は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

40

50

一般式 [9]
 【 0 0 7 5 】
 【 化 9 】



10

20

【 0 0 7 6 】

[式中、R⁵⁵ ~ R⁶⁸は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または - N (X⁷) X⁸で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、R⁵⁵ ~ R⁶⁸の内、少なくとも一つは - N (X⁷) X⁸で表される基である。ここに、X⁷およびX⁸は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。R⁵⁵ ~ R⁶⁸、X⁷、およびX⁸は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

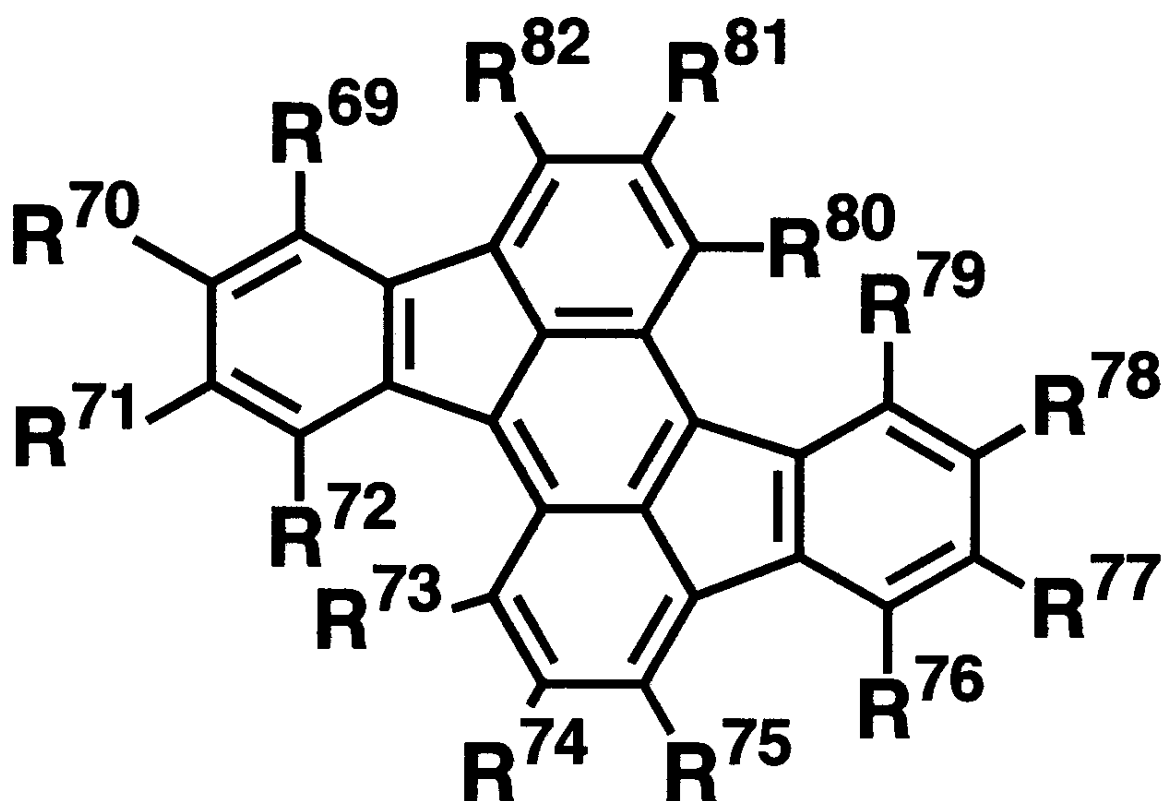
30

一般式 [1 0]

【 0 0 7 7 】

40

【化10】



10

20

【0078】

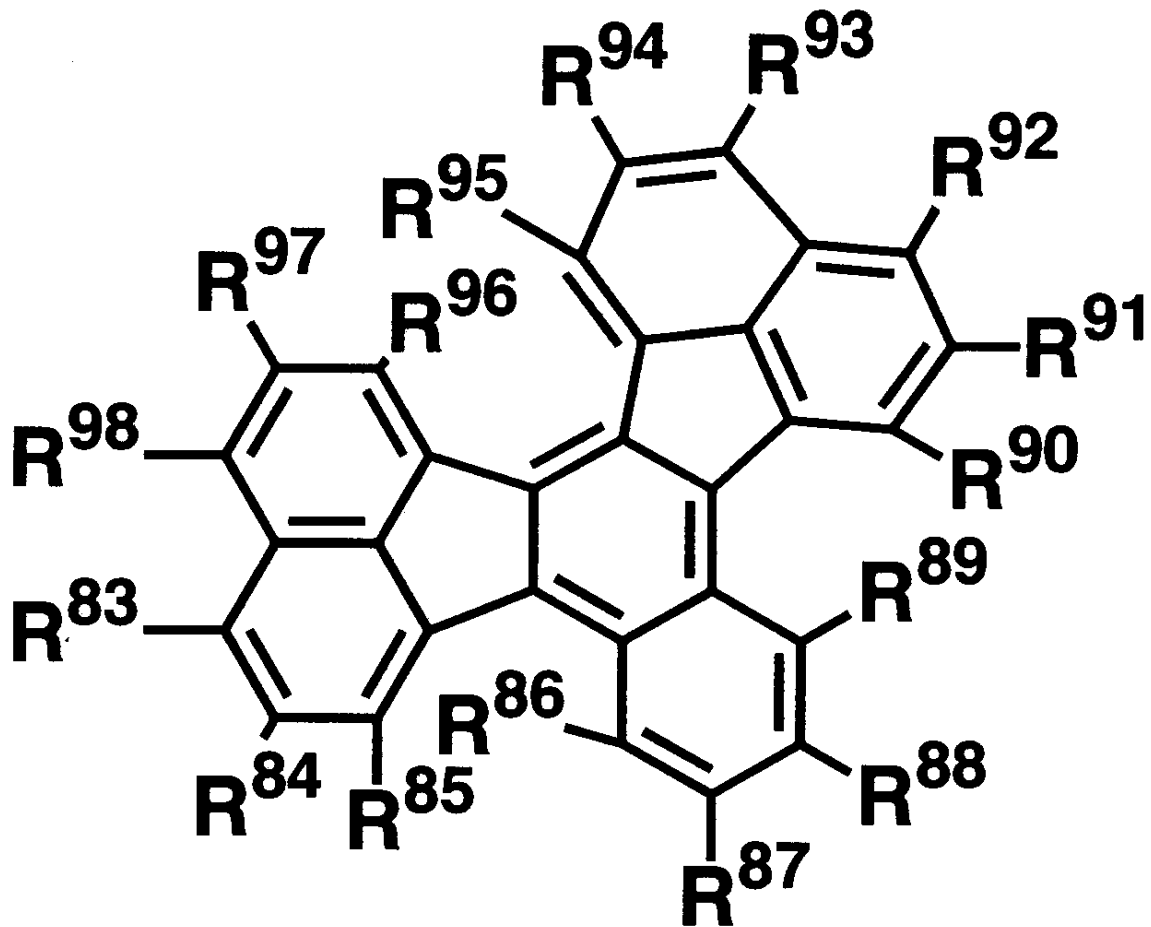
[式中、R⁶⁹ ~ R⁸²は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または - N (X⁹) X¹⁰で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、R⁶⁹ ~ R⁸²の内、少なくとも一つは - N (X⁹) X¹⁰で表される基である。ここに、X⁹およびX¹⁰は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。R⁶⁹ ~ R⁸²、X⁹、およびX¹⁰は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

30

一般式 [11]

【0079】

【化 1 1】



10

20

【0080】

[式中、 $R^{83} \sim R^{98}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^{11})X^{12}$ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、 $R^{83} \sim R^{98}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^{11})X^{12}$ で表される基である。ここに、 X^{11} および X^{12} は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^{83} \sim R^{98}$ 、 X^{11} 、および X^{12} は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

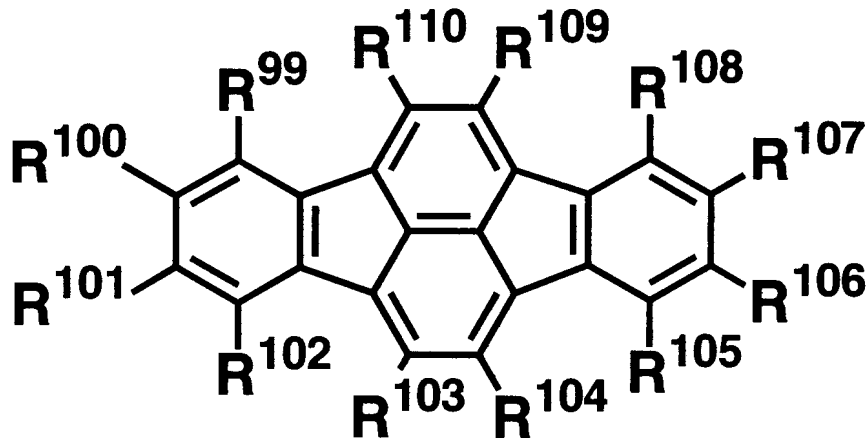
30

一般式 [1 2]

【0081】

40

【化12】



10

【0082】

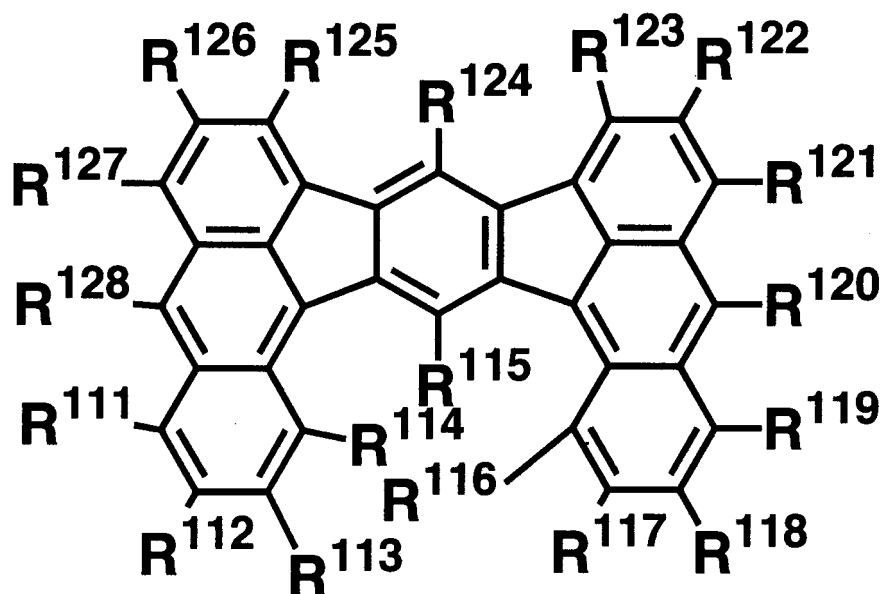
[式中、R⁹⁹ ~ R¹¹⁰は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキシル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または - N (X¹³) X¹⁴で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、R⁹⁹ ~ R¹¹⁰の内、少なくとも一つは - N (X¹³) X¹⁴で表される基である。ここに、X¹³およびX¹⁴は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。R⁹⁹ ~ R¹¹⁰、X¹³およびX¹⁴は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

20

一般式 [13]

【0083】

【化13】



30

【0084】

[式中、R¹¹¹ ~ R¹²⁸は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキシル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または - N (X¹⁵) X¹⁶で表される基より選ばれ

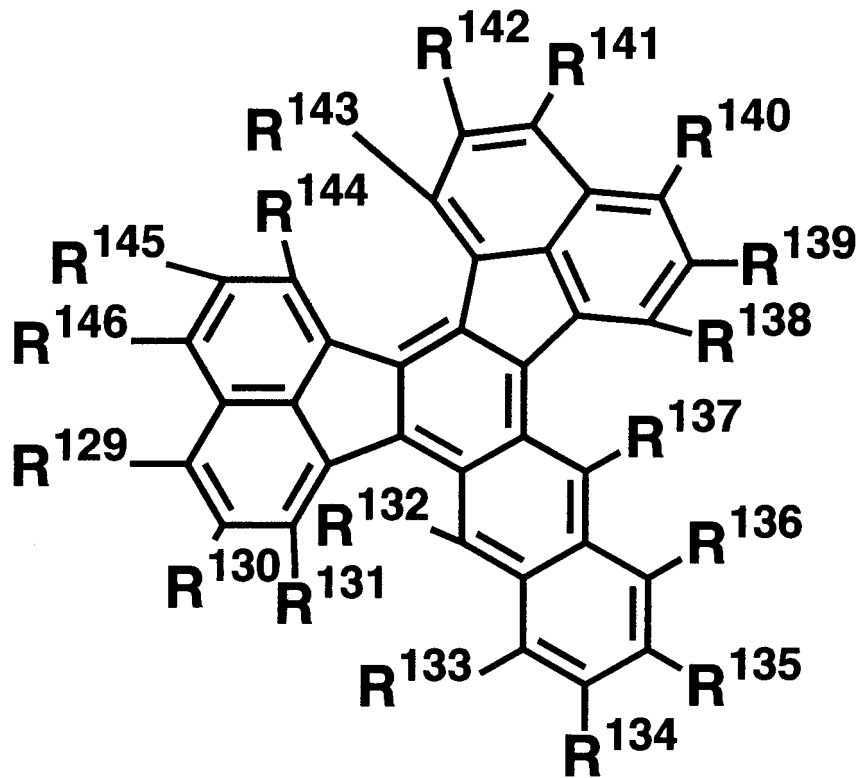
50

る1価の有機残基であって、 $R^{111} \sim R^{128}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^{15})X^{16}$ で表される基である。ここに、 X^{15} および X^{16} は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^{111} \sim R^{128}$ 、 X^{15} 、および X^{16} は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

一般式 [14]

【 0085 】

【 化 14 】



10

20

【 0086 】

[式中、 $R^{129} \sim R^{146}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキシル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^{17})X^{18}$ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、 $R^{129} \sim R^{146}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^{17})X^{18}$ で表される基である。ここに、 X^{17} および X^{18} は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^{129} \sim R^{146}$ 、 X^{17} 、および X^{18} は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

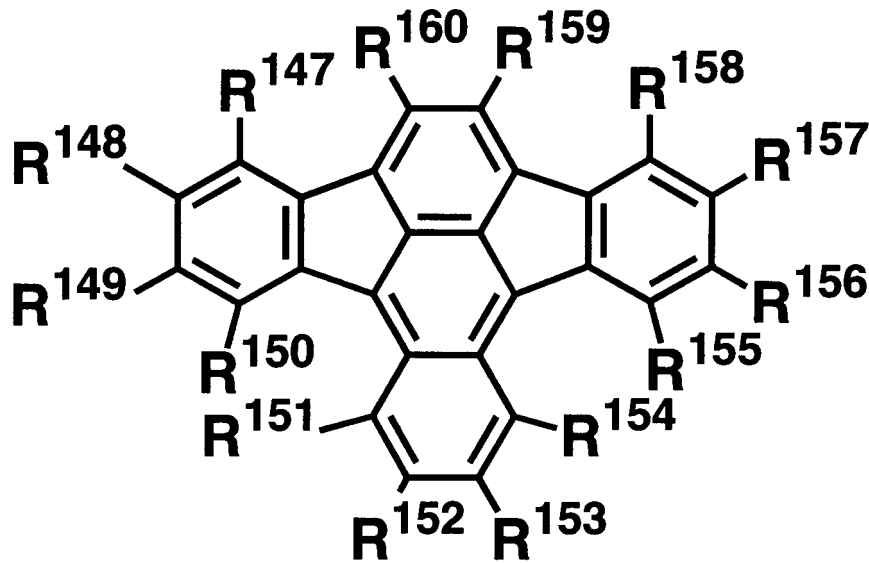
30

40

一般式 [15]

【 0087 】

【化15】



10

【0088】

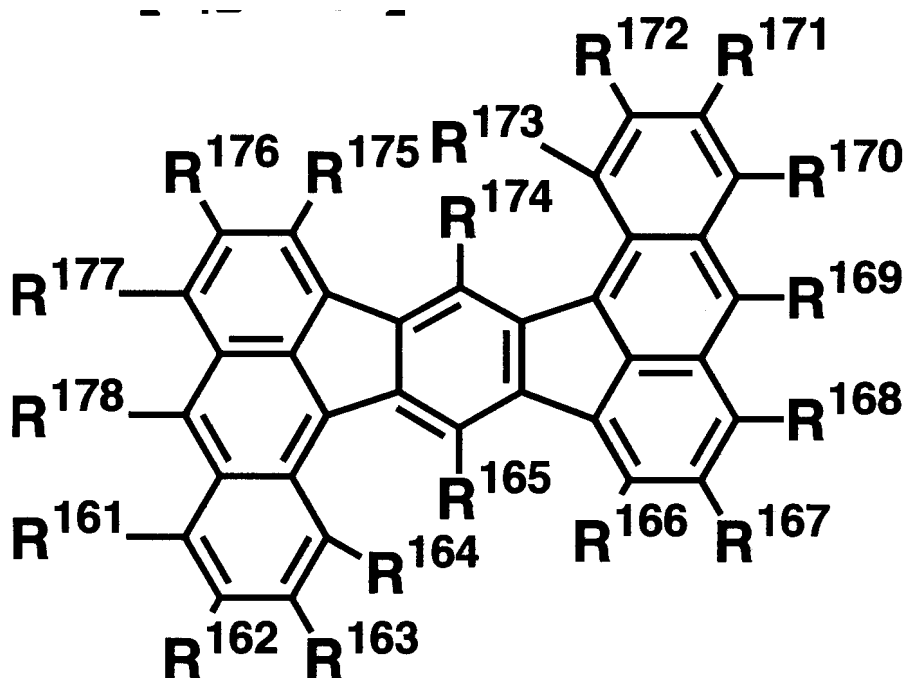
[式中、R¹⁴⁷～R¹⁶⁰は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシル基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または-N(X¹⁹)X²⁰で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、R¹⁴⁷～R¹⁶⁰の内、少なくとも一つは-N(X¹⁹)X²⁰で表される基である。ここに、X¹⁹およびX²⁰は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。R¹⁴⁷～R¹⁶⁰、X¹⁹、およびX²⁰は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

20

一般式【16】

【0089】

【化16】



40

【0090】

50

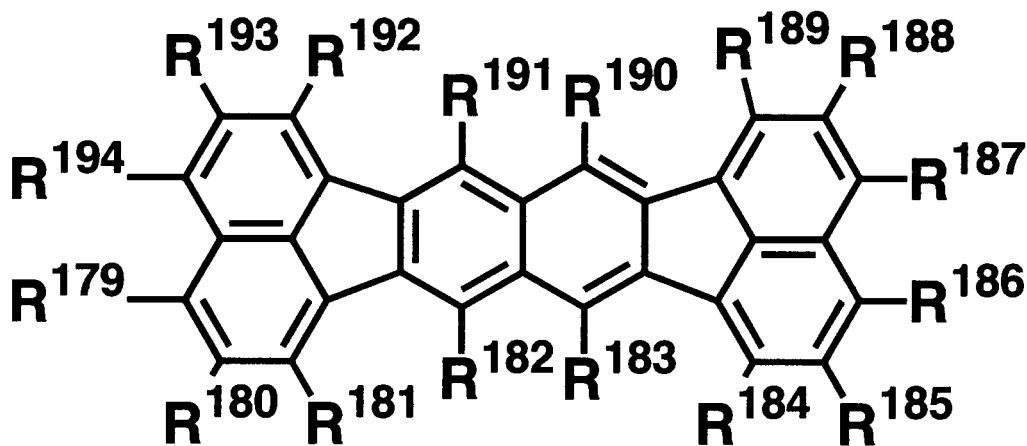
[式中、 $R^{161} \sim R^{178}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^{21})X^{22}$ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、 $R^{161} \sim R^{178}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^{21})X^{22}$ で表される基である。ここに、 X^{21} および X^{22} は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^{161} \sim R^{178}$ 、 X^{21} 、および X^{22} は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

10

一般式 [17]

【 0 0 9 1 】

【 化 1 7 】



20

【 0 0 9 2 】

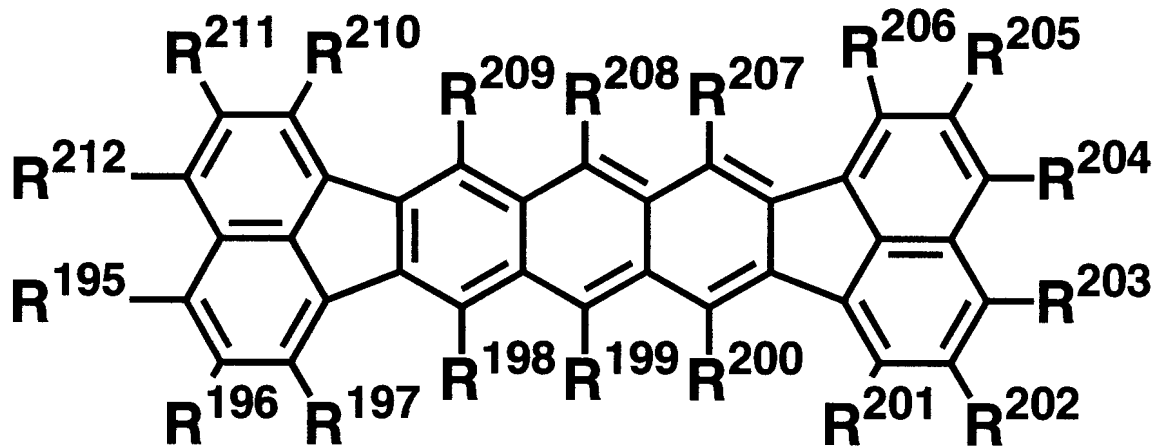
[式中、 $R^{179} \sim R^{194}$ は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または $-N(X^{23})X^{24}$ で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、 $R^{179} \sim R^{194}$ の内、少なくとも一つは $-N(X^{23})X^{24}$ で表される基である。ここに、 X^{23} および X^{24} は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。 $R^{179} \sim R^{194}$ 、 X^{23} 、および X^{24} は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

30

一般式 [18]

【 0 0 9 3 】

【化18】



10

【0094】

[式中、R¹⁹⁵～R²¹²は、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、シアノ基、ニトロ基、ハロゲン原子、または-N(X²⁵)X²⁶で表される基より選ばれる1価の有機残基であって、R¹⁹⁵～R²¹²の内、少なくとも一つは-N(X²⁵)X²⁶で表される基である。ここに、X²⁵およびX²⁶は、それぞれ独立に、水素原子、置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、または置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基である。R¹⁹⁵～R²¹²、X²⁵、およびX²⁶は、互いに隣接する基で環を形成しても良い。]

20

【0095】

上記一般式[8]のR⁴¹～R⁵⁴、上記一般式[9]のR⁵⁵～R⁶⁸、上記一般式[10]のR⁶⁹～R⁸²、上記一般式[11]のR⁸³～R⁹⁸、上記一般式[12]のR⁹⁹～R¹¹⁰、上記一般式[13]のR¹¹¹～R¹²⁸、上記一般式[14]のR¹²⁹～R¹⁴⁶、上記一般式[15]のR¹⁴⁷～R¹⁶⁰、上記一般式[16]のR¹⁶¹～R¹⁷⁸、上記一般式[17]のR¹⁷⁹～R¹⁹⁴、上記一般式[18]のR¹⁹⁵～R²¹²は、それぞれ少なくとも一つは電子吸引性の基であるのが好ましい。

30

【0096】

以上、一般式[8]～一般式[18]で説明したR⁴¹～R²¹²およびX⁵～X²⁶における置換もしくは未置換の1価の脂肪族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の芳香族炭化水素基、置換もしくは未置換の1価の脂肪族複素環基、置換もしくは未置換の1価の芳香族複素環基、置換もしくは未置換のアルコキシ基、置換もしくは未置換のアリールオキシ基、置換もしくは未置換のトリアルキルシリル基、およびハロゲン原子とは、上述したものと同義である。

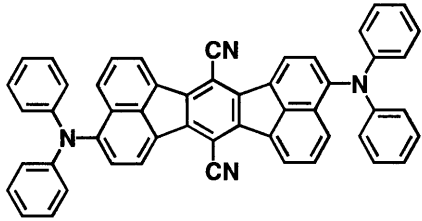
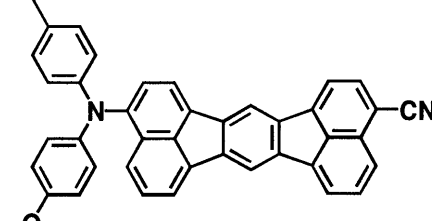
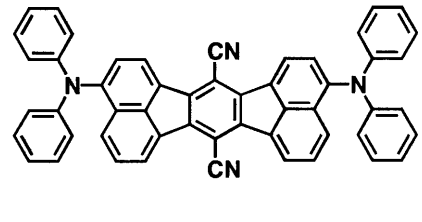
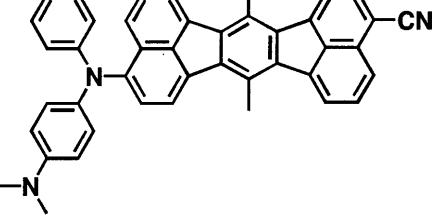
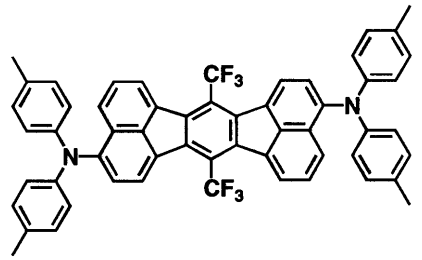
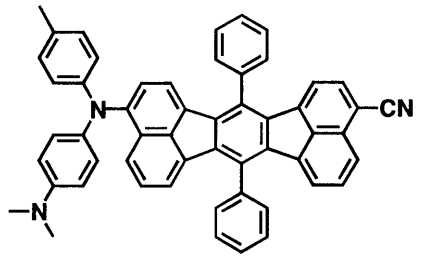
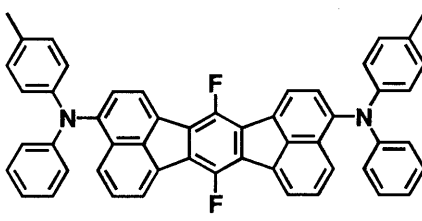
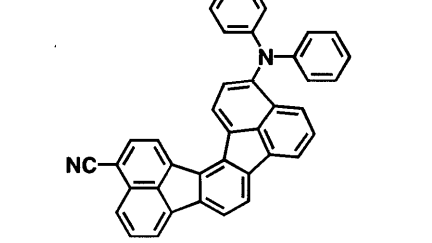
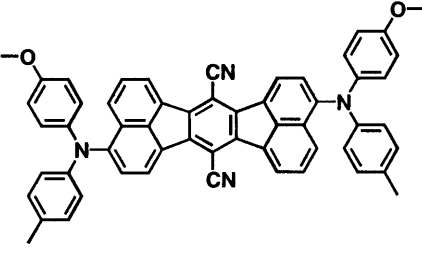
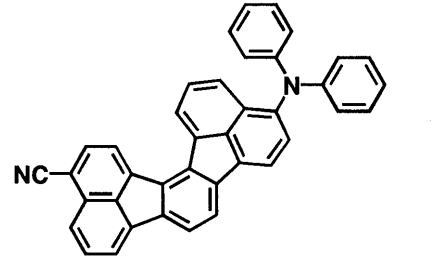
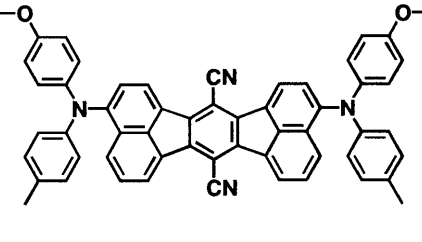
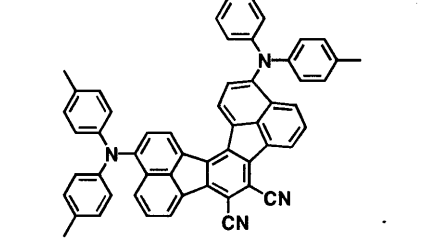
【0097】

以下、表2に本発明で使用されるフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物の代表例を示すが、本発明は、なんらこれらに限定されるものではない。

40

【0098】

【表 2】

化合物	化学構造	化合物	化学構造
81		87	
82		88	
83		89	
84		90	
85		91	
86		92	

10

20

30

40

【表 2】

化合物	化学構造	化合物	化学構造
93		99	
94		100	
95		101	
96		102	
97		103	
98		104	

10

20

30

40

【 0 1 0 0 】

【表 2】

化合物	化学構造	化合物	化学構造
105		111	
106		112	
107		113	
108		114	
109		115	
110		116	

【 0 1 0 1 】

10

20

30

40

【表 2】

化合物	化学構造	化合物	化学構造
117		123	
118		124	
119		125	
120		126	
121		127	
122		128	

10

20

30

40

【表 2】

化合物	化学構造	化合物	化学構造
129		135	
130		136	
131		137	
132		138	
133		139	
134		140	

【 0 1 0 3 】

ところで、有機 EL 素子は、陽極と陰極間に一層または多層の有機層を形成した素子が

10

20

30

40

50

ら構成されるが、ここで、一層型有機EL素子とは、陽極と陰極との間に発光層のみからなる素子を指す。一方、多層型有機EL素子とは、発光層の他に、発光層への正孔や電子の注入を容易にしたり、発光層内での正孔と電子との再結合を円滑に行わせたりすることを目的として、正孔注入層、正孔輸送層、正孔阻止層、電子注入層などを積層させたものを指す。したがって、多層型有機EL素子の代表的な素子構成としては、(1)陽極/正孔注入層/発光層/陰極、(2)陽極/正孔注入層/正孔輸送層/発光層/陰極、(3)陽極/正孔注入層/発光層/電子注入層/陰極、(4)陽極/正孔注入層/正孔輸送層/発光層/電子注入層/陰極、(5)陽極/正孔注入層/発光層/正孔阻止層/電子注入層/陰極、(6)陽極/正孔注入層/正孔輸送層/発光層/正孔阻止層/電子注入層/陰極、(7)陽極/発光層/正孔阻止層/電子注入層/陰極、(8)陽極/発光層/電子注入層/陰極等の多層構成で積層した素子構成が考えられる。

10

【0104】

ここで、正孔注入層には、発光層に対して優れた正孔注入効果を示し、かつ陽極界面との密着性と薄膜形成性に優れた正孔注入層を形成できる正孔注入材料が用いられる。また、このような材料を多層積層させ、正孔注入効果の高い材料と正孔輸送効果の高い材料とを多層積層させた場合、それぞれに用いる材料を正孔注入材料、正孔輸送材料と呼ぶことがある。そのような正孔注入材料あるいは正孔輸送材料の例としては、フタロシアニン誘導体、ナフタロシアニン誘導体、ポルフィリン誘導体、オキサジアゾール誘導体、トリアゾール誘導体、イミダゾール誘導体、イミダゾロン誘導体、イミダゾールチオン誘導体、ピラゾリン誘導体、ピラゾロン誘導体、テトラヒドロイミダゾール誘導体、オキサゾール誘導体、オキサジアゾール誘導体、ヒドラゾン誘導体、アシルヒドラゾン誘導体、スチルベン誘導体、芳香族三級アミン誘導体、ポリビニルカルバゾール誘導体、ポリシラン誘導体等があげられるが、素子作成に必要な薄膜を形成し、陽極からの正孔を注入ができて、正孔を輸送できる材料であれば、特にこれらに限定されるものではない。

20

【0105】

上記材料の中でも特に好適に使用することのできる正孔注入材料あるいは正孔輸送材料としては、芳香族三級アミン誘導体およびフタロシアニン誘導体等があげられる。芳香族三級アミン誘導体としては、例えば、N, N'-ジフェニル-N, N'-(3-メチルフェニル)-1, 1'-ビフェニル-4, 4'-ジアミン、N, N, N', N'-(4-メチルフェニル)-1, 1'-フェニル-4, 4'-ジアミン、N, N, N', N'-(4-メチルフェニル)-1, 1'-ビフェニル-4, 4'-ジアミン、N, N'-ジフェニル-N, N'-ジナフチル-1, 1'-ビフェニル-4, 4'-ジアミン、N, N'-(メチルフェニル)-N, N'-(4-n-ブチルフェニル)-フェナントレン-9, 10-ジアミン、N, N-ビス(4-ジ-4-トリルアミノフェニル)-4-フェニル-シクロヘキサン、およびこれら芳香族三級アミン骨格を有するオリゴマーまたはポリマーがあげられ、これらは正孔注入材料、正孔輸送材料いずれにも好適に使用することができる。また、フタロシアニン(Pc)誘導体としては、例えば、H₂Pc、CuPc、CoPc、NiPc、ZnPc、PdPc、FePc、MnPc、ClAlPc、ClGaPc、ClInPc、ClSnPc、Cl₂SiPc、(HO)AlPc、(HO)GaPc、VOPc、TiOPc、MoOPc、GaPc-O-GaPc等のフタロシアニン誘導体等があげられ、これらは特に正孔注入材料に好適に使用することができる。

30

40

【0106】

一方、電子注入層には、発光層に対して優れた電子注入効果を示し、かつ陰極界面との密着性と薄膜形成性に優れた電子注入層を形成できる電子注入材料が用いられる。そのような電子注入材料の例としては、金属錯体化合物、含窒素五員環誘導体、フルオレノン誘導体、アントラキノジメタン誘導体、ジフェノキノン誘導体、チオピランジオキシド誘導体、ペリレンテトラカルボン酸誘導体、フレオレニリデンメタン誘導体、アントロン誘導体、シロール誘導体、カルシウムアセチルアセトナート、酢酸ナトリウムなどがあげられる。また、セシウム等の金属をバソフェナントロリンにドーブした無機/有機複合材料(高分子学会予稿集, 第50巻, 4号, 660頁, 2001年発行に記載)や第50回応用

50

物理学関連連合講演会講演予稿集、No. 3、1402頁、2003年発行記載のBCP、TPP、T5MPyTZ等も電子注入材料の例としてあげられるが、素子作成に必要な薄膜を形成し、陰極からの電子を注入できて、電子を輸送できる材料であれば、特にこれらに限定されるものではない。

【0107】

上記電子注入材料の中でも特に効果的な電子注入材料としては、金属錯体化合物または含窒素五員環誘導体があげられる。本発明に使用可能な電子注入材料の内、好ましい金属錯体化合物としては、トリス(8-ヒドロキシキノリナート)アルミニウム(Alq3)、トリス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)アルミニウム、トリス(5-フェニル-8-ヒドロキシキノリナート)アルミニウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)(1-ナフトラート)アルミニウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)(2-ナフトラート)アルミニウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)(フェノラート)アルミニウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)(4-シアノ-1-ナフトラート)アルミニウム、ビス(4-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)(1-ナフトラート)アルミニウム、ビス(5-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)(2-ナフトラート)アルミニウム、ビス(5-フェニル-8-ヒドロキシキノリナート)(フェノラート)アルミニウム、ビス(5-シアノ-8-ヒドロキシキノリナート)(4-シアノ-1-ナフトラート)アルミニウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)クロロアルミニウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)(o-クレゾラート)アルミニウム等のアルミニウム錯体化合物、トリス(8-ヒドロキシキノリナート)ガリウム、トリス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)ガリウム、トリス(2-メチル-5-フェニル-8-ヒドロキシキノリナート)ガリウム、ビス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)(1-ナフトラート)ガリウム、ビス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)(2-ナフトラート)ガリウム、ビス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)(フェノラート)ガリウム、ビス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)(4-シアノ-1-ナフトラート)ガリウム、ビス(2,4-ジメチル-8-ヒドロキシキノリナート)(1-ナフトラート)ガリウム、ビス(2,5-ジメチル-8-ヒドロキシキノリナート)(2-ナフトラート)ガリウム、ビス(2-メチル-5-フェニル-8-ヒドロキシキノリナート)(フェノラート)ガリウム、ビス(2-メチル-5-シアノ-8-ヒドロキシキノリナート)(4-シアノ-1-ナフトラート)ガリウム、ビス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)クロロガリウム、ビス(2-メチル-8-ヒドロキシキノリナート)(o-クレゾラート)ガリウム等のガリウム錯体化合物の他、8-ヒドロキシキノリナートリチウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)銅、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)マンガン、ビス(10-ヒドロキシベンゾ[h]キノリナート)ベリリウム、ビス(8-ヒドロキシキノリナート)亜鉛、ビス(10-ヒドロキシベンゾ[h]キノリナート)亜鉛等の金属錯体化合物があげられる。

【0108】

また、本発明に使用可能な電子注入材料の内、好ましい含窒素五員環誘導体としては、オキサゾール誘導体、チアゾール誘導体、オキサジアゾール誘導体、チアジアゾール誘導体、トリアゾール誘導体があげられ、具体的には、2,5-ビス(1-フェニル)-1,3,4-オキサゾール、2,5-ビス(1-フェニル)-1,3,4-チアゾール、2,5-ビス(1-フェニル)-1,3,4-オキサジアゾール、2-(4'-tert-ブチルフェニル)-5-(4"-ピフェニル)-1,3,4-オキサジアゾール、2,5-ビス(1-ナフチル)-1,3,4-オキサジアゾール、1,4-ビス[2-(5-フェニルオキサジアゾリル)]ベンゼン、1,4-ビス[2-(5-フェニルオキサジアゾリル)-4-tert-ブチルベンゼン]、2-(4'-tert-ブチルフェニル)-5-(4"-ピフェニル)-1,3,4-チアジアゾール、2,5-ビス(1-ナフチル)-1,3,4-チアジアゾール、1,4-ビス[2-(5-フェニルチアジアゾリル)]ベンゼン、2-(4'-tert-ブチルフェニル)-5-(4"-ピフェニル)-1,3,4-トリアゾール、2,5-ビス(1-ナフチル)-1,3,4-トリアゾール、1,4-ビス

10

20

30

40

50

[2 - (5 - フェニルトリアゾリル)] ベンゼン等があげられる。

【 0 1 0 9 】

さらに、正孔阻止層には、発光層を経由した正孔が電子注入層に達するのを防ぎ、薄膜形成性に優れた層を形成できる正孔阻止材料が用いられる。そのような正孔阻止材料の例としては、ビス(8 - ヒドロキシキノリナート) (4 - フェニルフェノラート) アルミニウム等のアルミニウム錯体化合物や、ビス(2 - メチル - 8 - ヒドロキシキノリナート) (4 - フェニルフェノラート) ガリウム等のガリウム錯体化合物、2 , 9 - ジメチル - 4 , 7 - ジフェニル - 1 , 1 0 - フェナントロリン(B C P) 等の含窒素縮合芳香族化合物があげられる。

【 0 1 1 0 】

また、本発明の有機 E L 素子用材料を発光層に使用する場合、一般式 [1] で表されるアミン化合物と、一般式 [2] で表されるアザフルオランテン骨格を有するアザ芳香族化合物の少なくとも一つとを含有するが、他のホスト材料やドーパントを含有していても構わない。この場合、ドーパントの濃度はホスト材料に対して 0 . 0 0 1 ~ 3 0 重量% の範囲で含有されることが好ましく、0 . 0 1 ~ 1 0 重量% の範囲で含有されることがより好ましく、0 . 1 ~ 5 重量% の範囲で含有されることがさらに好ましい。

【 0 1 1 1 】

本有機 E L 素子における発光層中には、本発明の有機 E L 素子用材料の他に、必要に応じて、他の発光材料やドーピング材料のみならず、先に述べた正孔注入材料や電子注入材料を二種類以上組み合わせて使用することもできる。また、正孔注入層、発光層、電子注入層は、それぞれ二層以上の層構成により形成されても良い。

【 0 1 1 2 】

さらに、本発明の有機 E L 素子の陽極に使用される材料は、炭素、アルミニウム、バナジウム、鉄、コバルト、ニッケル、タングステン、銀、金、白金、パラジウム等の金属およびそれらの合金、酸化亜鉛、酸化錫、酸化インジウム、酸化錫インジウム(I T O) 等の導電性金属酸化物、ポリチオフェン、ポリピロール、ポリアニリン等の導電性ポリマー等があげられる。特に本発明の有機 E L 素子の陽極に使用される導電性材料としては、できるだけ抵抗値の低いものが好ましく、I T O ガラス、N E S A ガラスが好適に使用される。

【 0 1 1 3 】

また、本発明の有機 E L 素子の陰極に使用される材料は、電子を効率よく有機 E L 素子に注入できる材料であれば特に限定されないが、一般に、白金、金、銀、銅、鉄、錫、亜鉛、アルミニウム、インジウム、クロム、リチウム、ナトリウム、カリウム、カルシウム、マグネシウムおよびこれらの合金があげられる。ここで、合金としては、マグネシウム / 銀、マグネシウム / インジウム、リチウム / アルミニウム等が代表例としてあげられるが、リチウム、ナトリウム、カリウム、カルシウム、マグネシウムなどの低仕事関数金属を含む合金が好ましい。また、フッ化リチウムのような無機塩を上記低仕事関数金属の代わりに使用することも可能である。また、これら陰極の作成方法としては、抵抗加熱、電子線ビーム照射、スパッタリング、イオンプレーティング、コーティングなどの業界公知の方法で作成することができる。以上述べた陽極および陰極は、必要に応じて二層以上の層構成により形成されていても良い。

【 0 1 1 4 】

本発明の有機 E L 素子からの発光を効率よく取り出すためには、発光を取り出す面の基板の材質が充分透明であることが望ましく、具体的には素子からの発光の発光波長領域における透過率が 5 0 % 以上、好ましくは 9 0 % 以上であることが望ましい。これら基板は、機械的、熱的強度を有し、透明であれば特に限定されるものではないが、例えば、ガラスの他、ポリエチレン、ポリエーテルスルホン、ポリプロピレン等の透明性ポリマーが推奨される。

【 0 1 1 5 】

また、本発明の有機 E L 素子の各層の形成方法としては、真空蒸着、電子線ビーム照射

10

20

30

40

50

、スパッタリング、プラズマ、イオンプレーティング等の乾式成膜法、もしくはスピニング、ディッピング、フローコーティング等の湿式成膜法のいずれかの方法を適用することができる。各層の膜厚は特に限定されるものではないが、膜厚が厚すぎると一定の光出力を得るために大きな印加電圧が必要となり効率が悪くなり、逆に膜厚が薄すぎるとピンホール等が発生し、電界を印加しても十分な発光輝度が得にくくなる。したがって、各層の膜厚は、1 nmから1 μmの範囲が適しているが、10 nmから0.2 μmの範囲がより好ましい。

【0116】

また、有機EL素子の温度、湿度、雰囲気等に対する安定性向上のために、素子の表面に保護層を設けたり、樹脂等により素子全体を被覆や封止を施したりしても良い。特に素子全体を被覆や封止する際には、光によって硬化する光硬化性樹脂が好適に使用される。

10

【0117】

以上述べたように、本有機EL素子は、低い駆動電圧で高い色純度と輝度を示す赤色発光を得ることが可能である。故に、本有機EL素子は、壁掛けテレビ等のフラットパネルディスプレイや平面発光体として、さらには、複写機やプリンター等の光源、液晶ディスプレイや計器類等の光源、表示板、標識灯等への応用が考えられる。

【実施例】

【0118】

以下、実施例にて本発明を具体的に説明するが、本発明は下記実施例に何ら限定されるものではない。本例では、特に断りのない限り、混合比は全て重量比を示す。また、電極面積2 mm × 2 mmの有機EL素子の特性を測定した。

20

【0119】

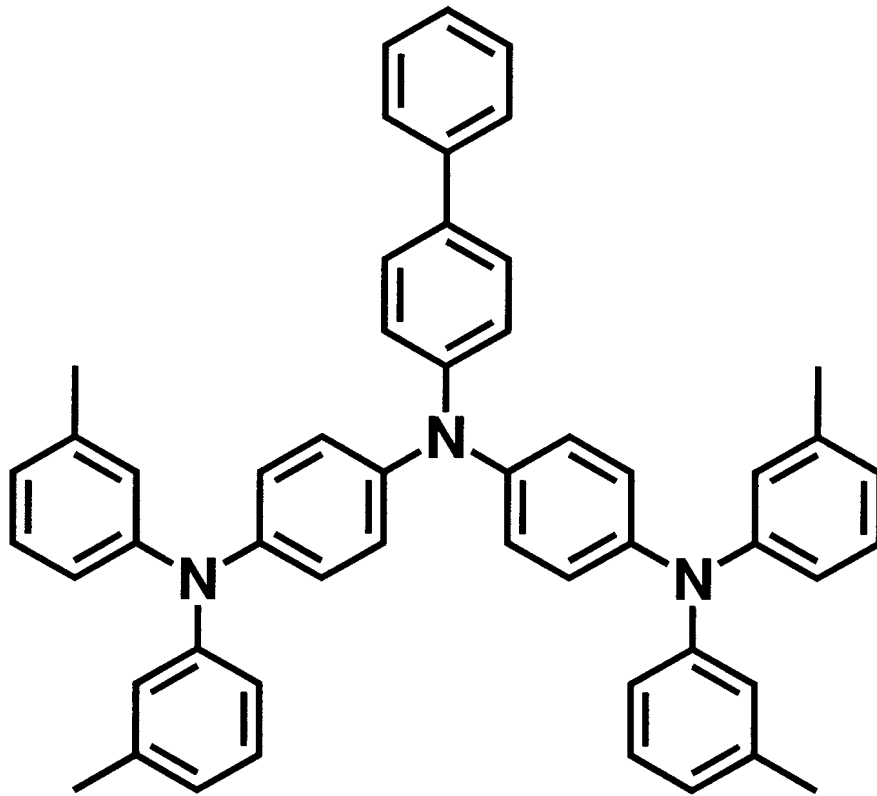
実施例1

洗浄したITO電極付きガラス板上に、下記TPD74を真空蒸着して膜厚50 nmの正孔注入層を得た。次いで、下記NPDを真空蒸着して膜厚20 nmの正孔輸送層を得た。次いで、アミン化合物として表1の化合物3と、フルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物として表2の化合物85と化合物86の1:1混合物とを、40:2(重量比)の組成比で共蒸着して膜厚50 nmの発光層を得た。次いでトリス(8-ヒドロキシキノリナート)アルミニウム(Alq3)を蒸着して膜厚10 nmの電子注入層を得た。さらにその上に、LiFを0.2 nm蒸着した後、Alを蒸着して膜厚150 nmの電極を形成して有機EL素子を得た。この素子について通電試験を行ったところ、駆動電圧5 Vにて870 cd/m²の赤色発光が得られた。

30

【0120】

【化19】



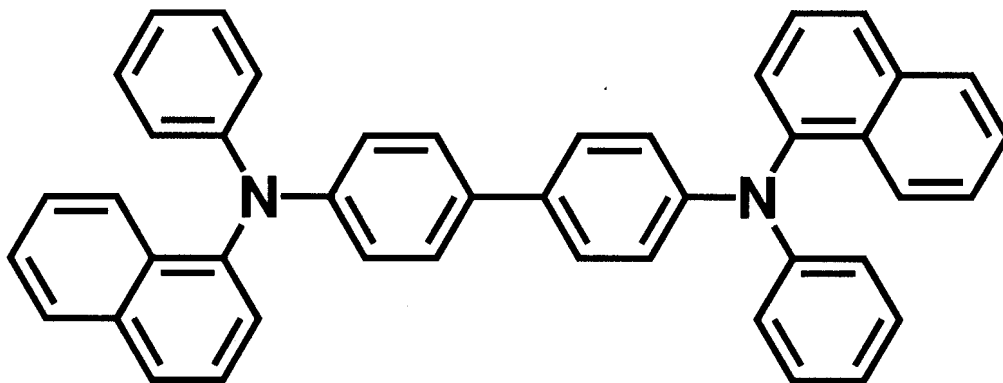
10

20

TPD74

【0121】

【化20】



30

40

NPD

【0122】

実施例2～実施例18

化合物3の代わりに表3に示すアミン化合物を用いる以外は、全て実施例1と同様の方法で有機EL素子を作製した。これらの素子における駆動電圧5Vでの輝度を併せて表3に示す。これらの素子はいずれも、駆動電圧5Vでの輝度はいずれも300cd/m²以上であった。

【0123】

【表 3】

実施例	化合物	輝度 (cd/m ²) (注)
2	5	780
3	12	330
4	24	840
5	26	330
6	28	370
7	29	490
8	32	310
9	45	690
10	49	720
11	50	680
12	53	740
13	59	380
14	66	580
15	68	510
16	69	890
17	70	710
18	80	630

注) 5Vでの輝度 (cd/m²) を表す。

【0124】

比較例 1 および比較例 2

化合物 3 の代わりに Alq3 もしくは下記 DPVDPAN を用いる以外は、実施例 1 と同様の方法で有機 EL 素子を作製した。これらの素子における駆動電圧 5V での輝度を表 4 に示す。これらの素子はいずれも、駆動電圧 5V での輝度が実施例 2 ~ 実施例 18 と比較して低いことは明らかである。

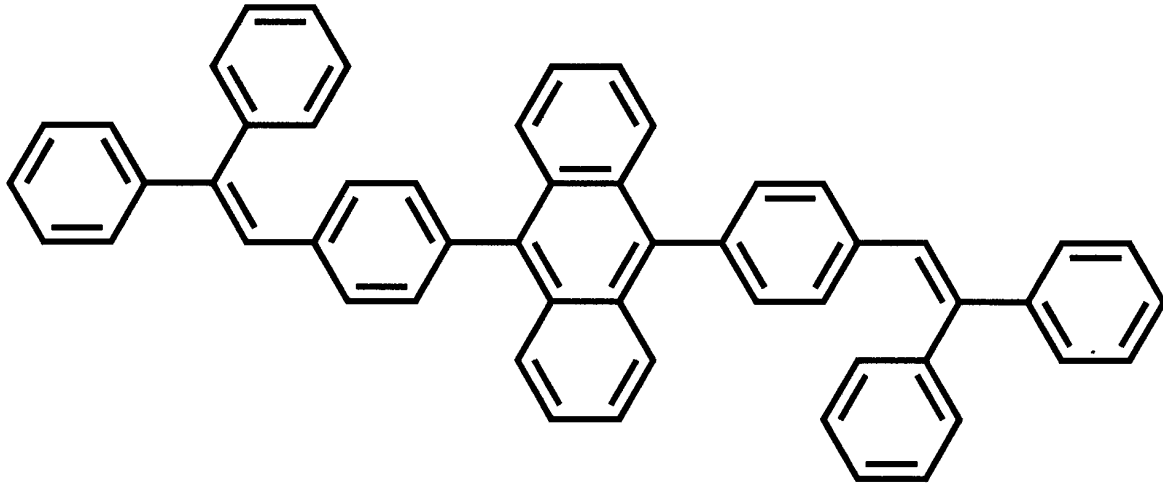
【0125】

10

20

30

【化 2 1】



10

DPVDPAN

【0 1 2 6】

【表 4】

20

比較例	化合物	輝度 (cd/m ²) (注)
1	Alq3	37
2	DPVDPAN	49

注) 5 Vでの輝度 (cd/m²) を表す。

【0 1 2 7】

実施例 19 ~ 実施例 28

化合物 85, 86の代わりに表5に示すフルオランテン骨格を有する縮合芳香族化合物を用いる以外は、全て実施例1と同様の方法で有機EL素子を作製した。これらの素子における駆動電圧5Vでの輝度を併せて表5に示す。これらの素子はいずれも、駆動電圧5Vでの輝度が500 cd/m²以上であった。

30

【0 1 2 8】

【表 5】

実施例	化合物	輝度 (cd/m ²) (注)
19	92	640
20	96	770
21	103, 104 (7:3混合物)	550
22	112	570
23	117	780
24	118, 119 (5:5混合物)	710
25	124, 125 (7:3混合物)	520
26	129	620
27	132, 133 (2:8混合物)	570
28	135, 136 (9:1混合物)	880

40

注) 5 Vでの輝度 (cd/m²) を表す。

【0 1 2 9】

50

以上述べた実施例から明らかなように、本発明の有機 EL 素子は低電圧駆動時での発光輝度の向上を達成することが可能である。

フロントページの続き

(51) Int.Cl.

F I

H 0 5 B 33/14

B

審査官 木村 伸也

(56) 参考文献 特開平 1 0 - 3 4 0 7 8 5 (J P , A)
特開 2 0 0 3 - 2 3 8 5 1 6 (J P , A)
特開 2 0 0 3 - 2 0 1 4 7 2 (J P , A)
特開 2 0 0 3 - 1 2 9 0 4 3 (J P , A)

(58) 調査した分野(Int.Cl. , DB名)

C 0 9 K 1 1 / 0 6 - 1 1 / 0 7

H 0 1 L 5 1 / 5 0 - 5 1 / 5 6

专利名称(译)	用于有机电致发光器件和有机电致发光器件的材料		
公开(公告)号	JP4325336B2	公开(公告)日	2009-09-02
申请号	JP2003327409	申请日	2003-09-19
[标]申请(专利权)人(译)	东洋油墨制造株式会社		
申请(专利权)人(译)	东洋インキ制造株式会社		
当前申请(专利权)人(译)	东洋インキ制造株式会社		
[标]发明人	田中洋明 須田康政 天野真臣 鳥羽泰正		
发明人	田中 洋明 須田 康政 天野 真臣 鳥羽 泰正		
IPC分类号	C09K11/06 H01L51/50 H05B33/14		
FI分类号	C09K11/06.620 C09K11/06.625 C09K11/06.635 C09K11/06.645 C09K11/06.660 H05B33/14.B		
F-TERM分类号	3K007/AB02 3K007/AB04 3K007/AB06 3K007/DB03 3K107/AA01 3K107/CC02 3K107/CC07 3K107/CC12 3K107/DD59		
审查员(译)	木村慎也		
其他公开文献	JP2005089674A		
外部链接	Espacenet		

摘要(译)

要解决的问题：提供一种有机电致发光元件，在低驱动电压下发出具有高色纯度和高亮度的红光。溶解：该有机电致发光元件用材料包含通式(1)表示的胺化合物和通式(2)表示的具有荧蒽骨架的稠合芳香族化合物。通式(1)中，Ar¹为per基，R¹，R²分别为1价芳香族烃基等。。在通式(2)中，R³至R¹⁰各自为一价有机残基等，并且R³中的至少一种至R¹⁰是由-N(X¹)X²表示的基团，其中X¹和X²各自为一价芳香族烃基等。Ž

